



「あまおう」6月の管理

南筑後普及指導センター

福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5 t 以上を目指しましょう

平成27年度産は平年と比較して1～2月の出荷量が少なくなりました。その原因としては、①11月の高昼温・高夜温による1番果房の前進化と小玉化、②普通作型の早進株の多発、③1番果房から2番果房までの果房間葉数が少なく、連続した収穫となったこと、④2番果房の先青果の発生などがあります。また、厳寒期の株のわい化と、連続した着果負担や天候不順により3月の出荷量が伸び悩み、春先の出荷ピークは低くなりました。

このことにより、平成27年度産の10a当たり数量は、前年並みとなりました。

高収量を確保するためには、まず充実した苗の確保が重要です。平成28年度産に向け、作型に応じた計画的な苗作りに心がけましょう。

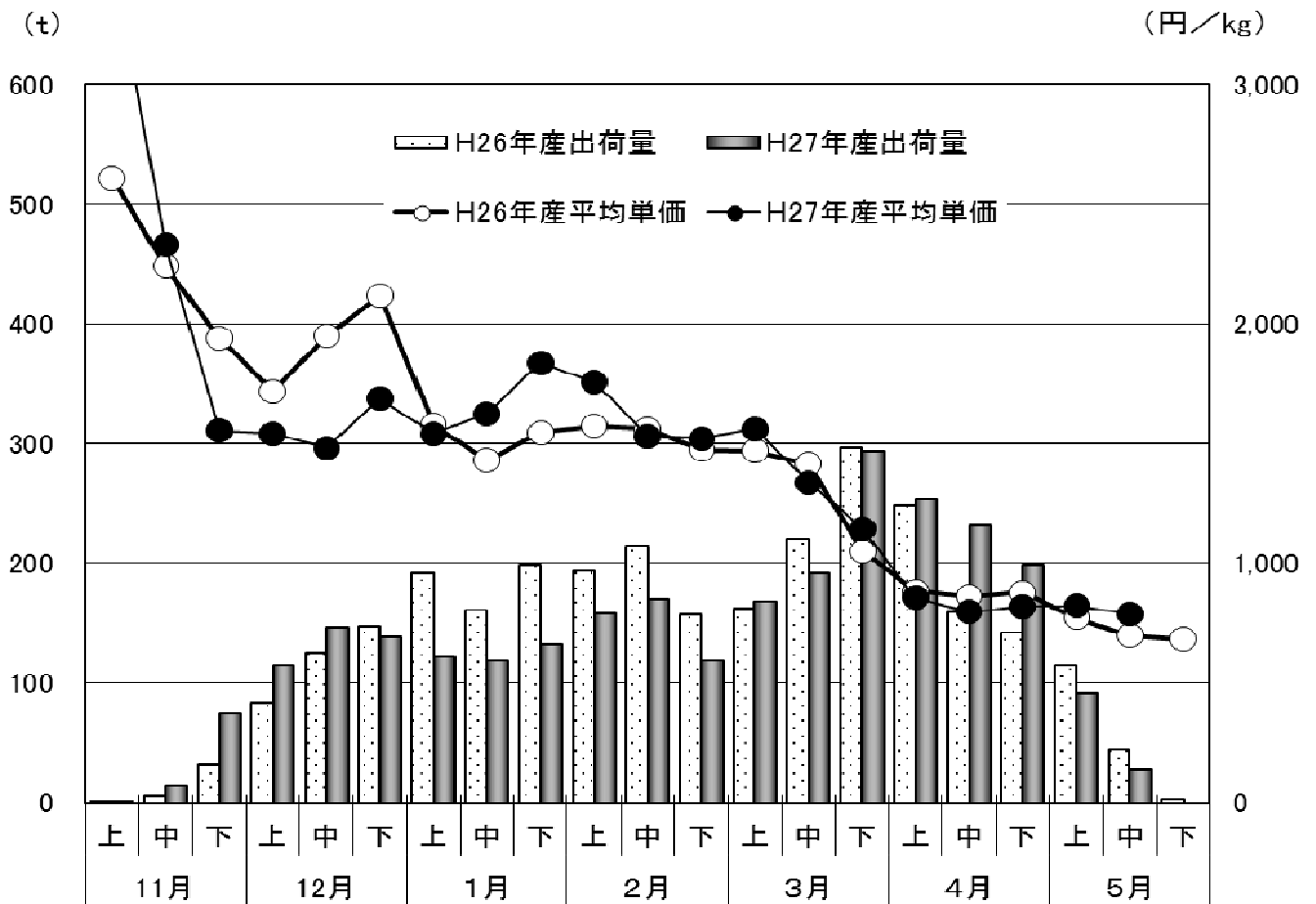


図1 南筑後普及指導センター管内のイチゴ出荷量と平均単価の推移

(5月20日現在:全農ふくれんデータより)

今後の管理

〈育苗目標〉

- ・ **クラウン径8mm以上の良苗作り**（収量確保）
- ・ **病害虫のない苗作り**（炭そ病、ハダニを本ぽに持ち込まない）
- ・ **作型に合わせた苗作り**（まず、作型を決めましょう）

今年は順調にランナーが発生していますが、肥料やかん水が不足したほ場や花梗除去が遅れたほ場において、子苗数の確保が遅れています。

子苗数の確保が遅れると「炭そ病」に感染する危険性が非常に高くなります。降雨前・後の予防防除を基本に、罹病株の早期発見・除去など、「炭そ病」対策を徹底して下さい。また、「うどんこ病」や「アブラムシ」、「ハダニ類」の発生も見られますので適期防除に努めましょう。

鉢上げ

【 さしポット 】 《 目標鉢上げ時期 》

8月処理開始の株冷	⇒	6月10日まで
8月処理開始の夜冷	⇒	6月15日まで
9月処理開始の株冷	⇒	6月15日まで
9月処理開始の夜冷 普通ポット	⇒	6月20日まで

- 子苗採取前に、必ず、「炭そ病」の予防散布を行う。
- 本葉2～3枚で、3～5cm発根した苗（それ以上伸びていれば根を切る）を用いる。
- ワラ被覆床では、採苗の1週間前からワラにかん水して子苗の発根を促進する。
- 活着を良くするため、鉢上げ前日に培土を十分湿らせておく。
- 極端な浅植えや深植えはしない。
- 鉢上げ後7日程度は、黒寒冷紗（610番）等で遮光して乾燥を防止する。
- 活着するまでは、薬水程度のかん水を1日に数回行う。
- 「炭そ病」対策として、採苗は雨の日を避け、気温の低い早朝に行う。
- 採苗後は苗が乾燥しないよう日陰に保管し、できる限り早く鉢上げする。
- 採苗当日に鉢上げできない場合は、苗が乾燥しないように湿らせた新聞紙に包み、2～3℃の予冷库内で保存する。（保存期間は3日間まで）

※ 苗の発根促進・活着促進のために

タチガレン液剤 1,000倍（挿し芽採取時 30分間挿し芽浸漬）

【 すけポット 】

- 降雨などで硬くなった培土は、根づき（根の入り）が悪いので、鉢土をほぐす。
- 鉢受け期間中は、「炭そ病」の定期的な防除を行う（特に鉢受け作業後）。
- 鉢土が乾燥すると根の伸張が悪くなるので、乾燥している場合はかん水を行う。
- 徒長防止のため、切り離し前の子苗への施肥は基本的に行わないが、窒素切れを起している場合は液肥や置き肥を施用する。

（ 裏面へ続く ）

- 必要数の子苗を受け終わったら、ランナーの先端を切除し、子苗の徒長防止と病虫害発生防止のため、親株の全葉摘除と直後の防除を行う。
- 子苗の切り離しは、最終鉢受け後10～15日目頃（根づいた頃）を目安に行う。ただし、雨天時は絶対に行わない。

鉢上げ後の育苗管理

【 肥培管理 】

「炭そ病」対策として、窒素過多にならない管理を徹底する。

- 活着したら、追肥（置き肥）を開始する（例：IB化成S1号で1～2粒/ポット）
- 活着後、2回程度液肥を施用する（例：OKF1で1,000～1,500倍）。
- 軟弱徒長させないため、梅雨時期は肥料を効かせすぎない。
- 肥料切れする期間がないように、液肥で肥効を調節する。

《施肥事例》

対象作型	置肥			最終追肥
	1回目 (6/下)	2回目 (7/中)	3回目 (7/下)	
株冷・夜冷 (8月に低温処理開始作型)	1～2粒	1～2粒	—	Ⅲ型:8月5日 Ⅳ型:8月10日 Ⅴ型:8月15日
普通ポット等 (9月に低温処理開始作型)	1～2粒	1～2粒	1～2粒	9月初

【 かん水 】

- 過湿にならないよう、鉢土の乾燥状態（根の状態）を常に観察してかん水を行う。
- 活着後は午前中を主体にかん水し、徒長防止と「炭そ病」予防のため、長時間濡れた状態にしない。特に、夕方のかん水が必要な場合は葉水程度とする。
- 小さいポットや棚式育苗は乾きやすいので、こまめにかん水する。

【 葉かぎ 】

- 葉かぎは、活着後根が十分に回ってから開始する。
- 葉数3.5枚を確保するように、古葉かぎを行う。
- 雨の日は絶対にしない。
- 葉かぎ後は、必ず、当日もしくは翌日に「炭そ病」の防除を行う。

【 病虫害防除 】

昨年度は、本ぼ定植後に炭そ病の発生が多かったので育苗期の予防を徹底し、罹病株は周辺株を含めて必ず廃棄しましょう！！

<炭そ病>

炭そ病菌は、雨やかん水で保菌株から周辺株に飛散し、感染・発病します。

- 「炭そ病」は、濡れた状態が半日程度続くとイチゴに感染する。そのため、午前中を中心としたかん水を行い、夕方には乾いた状態にする。
- 定期的な防除、降雨前後の防除及び葉かぎ後の防除に心がける。
- 発病株と周辺の株は、ほ場の外へ持ち出し処分する。
- ポット間隔をできる限り広くとる（18cmの間隔は確保する）。
- 育苗床の排水対策を講じておく。
- 育苗中の雨よけは、病原菌の飛散防止に効果が高い（特に梅雨期）。

<疫病>

- 梅雨時期から発生し始めるので、定期的な防除に心がける。なお、対策については「炭そ病」の項目を参照してください。

<ハダニ類>

平成 27 年産では本ぼでハダニ類が多発しました。

ハダニ類は外からの飛び込みはほとんどなく、イチゴの栽培サイクルの中で世代交代を繰り返します。そのため、いずれかのステージ（親株・育苗・本ぼ）でハダニ類の発生を断ち切ることがポイントとなります。

- 育苗期は葉数も少なく薬液がかかりやすいため、育苗期の防除を徹底し、本ぼに持ち込まないように心がける。

本田の土づくり・土壌消毒

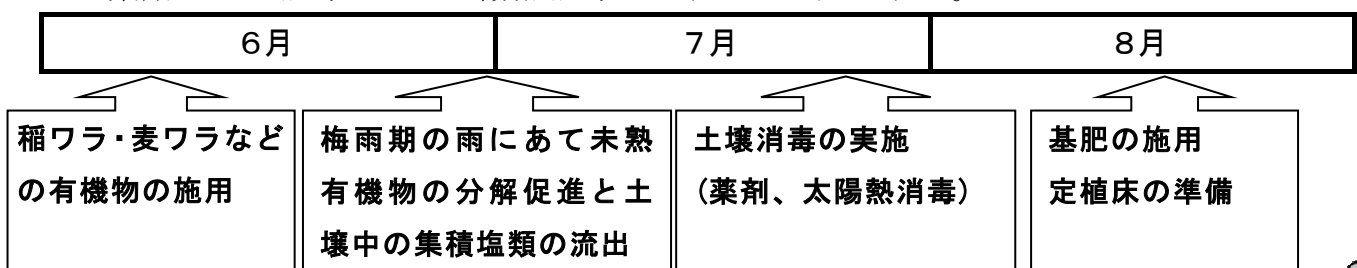
8月末から9月にかけて雨天日が連続するので、本ぼ準備が遅れるほ場が多く見受けられます。本ぼ準備は余裕を持って早めに行いましょう！！

● 有機物の施用

- ▶ イチゴ栽培で消耗する土壌有機物は、堆肥約 2 t / 10 a に相当する。このため、毎年 3 ~ 4 t / 10 a の堆肥を施用する。
- ▶ 稲ワラ・麦ワラ・家畜ふん堆肥等の有機物は、梅雨前に投入して土壌混和し、十分な雨にあてる。（分解促進、塩類溶脱のため）

● 土壌消毒

- ▶ 薬剤による消毒または太陽熱消毒のいずれかを実施する。



～「慣れ」と「油断」が事故を招きます～
”安全”な農作業と農薬使用を徹底しましょう！